HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「させる詞の寄せもなく、うるはしく言ひ流したり」攷 ：『西行上人談抄』における「四条大納言」の発言をめぐって
Author(s)	木谷, 満
Citation	国語国文研究, 152, 32-48
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89730
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_152_32-48.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「させる詞の寄せもなく、うるはしく言ひ流したり」攷

――『西行上人談抄』における「四条大納言」の発言をめぐって――

木谷　満

一　はじめに

『西行上人談抄』（以下、本書と呼ぶ）は、西行の言談を、彼の伊勢在住時代（治承四年〔一一八〇〕～文治六年〔一一八六〕）の弟子・蓮阿が、嘉禄・安貞（一二二五～一二二八）の頃に一書にまとめたものである。[1] 西行自身の歌論・歌学書は残されていないため、間接的にではあるものの、彼の和歌観を知ることのできる書物として、注目されてきた。

本書には、西行の語ったとされる作歌の心得や秀歌例、和歌説話などが記録されているが、その和歌説話の一つに、藤原高遠の歌道執心を語る、以下のような話がある。

病床の「四条大納言」[2]のもとに、正装をした「大弐高遠の三位」が現れ、それを見たほかの見舞い客たちは、「高遠」の正装を見咎める。一方「四条大納言」は、「高遠」の来訪も、きっと見舞いのためであろうと思いつつ、臥しながら対面するが、「高遠」は見舞いの言葉を一切口にせず、自らの歌について話し始める。すなわち、自身の歌と貫之の歌とを比較し、一、二度口ずさんだときには、自分の歌の方が優れていると思われるのに、四、五度口ずさむと、貫之の歌の方が格段に優れている、と言い、その理由を「四条大納言」に尋ねるのである。問題となるのは、次の二首の優劣である。

逢坂の関の清水にかげ見えて今や引くらんもち月の駒（貫之）
逢坂の関の岩かど踏みならし山立ち出づるきりはらの駒（高遠）[3]

「四条大納言」は、抱き起こされて座り、涙を落としながら高遠の歌道執心を誉めたうえで、この二首を二、三度吟詠し、次のように答える。

貫之が哥は、①させる詞の寄せもなく、うるはしく言ひ流したり。御哥は、「関の岩かど踏みならし」と言ふより、「山立ち出づるきりはらの駒」と言ふまで、②詞の寄せ巧みなるゆゑに、貫之が哥には劣りて候ふなり。（傍線と番号は稿者。以下同

じ。）

ここで言及される「詞の寄せ」とは、「縁語」を中心とした修辞法のことである。[4] すなわち、高遠詠は、そのような「詞の寄せ」が巧みであるために、たいした「詞の寄せ」もなく「うるはしく言ひ流し」た貫之詠に劣る（①・②）、と判じられたことになる。そして、この答えに納得した「高遠」は、結局、見舞いの言葉を口にしないまま帰る。一方、「四条大納言」は、「高遠」の帰った後、彼の正装は和歌談義のためであったのだと評する。すると翌日、「高遠」は略装で現れ、今度は中へも入らず、見舞いの言葉だけを伝えて帰って行く。それを見た人々は、前日の正装は、本当に和歌談義のためであったのだと知る。

二　問題の所在

この話は、和歌談義のためにわざわざ正装をしたという、「高遠」の数寄の行為を語る点に中心がある。本書では、この話の後に、橘為仲の数寄の話――陸奥下向の途中、歌枕である白河の関を通る際に、わざわざ狩衣、指貫を取り出して身に付けた――を配しており、「和歌正装論」とでもいうべきテーマの話として並べられている。したがって、本説話の「四条大納言」は、「高遠」の数寄を称揚するための人物であり、いわば脇役に過ぎない。しかし、本書の研究史においては、むしろ、そのような脇役である「四条大納言」の方が、注目を集めてきた。それは、本書の発話者である「上人」[5]が、上述の為仲の数寄の話を語った後で、改めてこの「四条大納言」の発言に言及しているからである。すなわち、

抑哥は、先に言ひつる両首の哥の沙汰にて心得つ[6]べし。貫之が哥のやうに、③させる詞の寄せもなく、言ひ流すべし。

という一節があり、③で、「四条大納言」の①をほぼそのまま引き、その結論を肯定している。そのため、この箇所に基づいて、西行も「詞の寄せ」のない歌を理想とした、と見られてきた。例えば、石津純道氏[7]は、この③を含む一節を引かれ、「詞の寄せ」について、

其の巧なるを斥けて唯言ひ流した方がよいとする所に〔西行ノ〕平明率直で自由な表現を重んずる態度が見られるのである。

と評された。また、錦仁氏[8]は、「公任の歌評説話」に、技巧を評価するものと批判するものという、「性格・内容の異なる二種類」の存在を指摘されたうえで、③以下について、

西行も貫之詠のごとき、言葉を巧まない麗しく自然な流れを喚起する表現を重んじたのである。

と説かれた。両氏とも、「上人」の発言③をそのままの形で受け入れ、それが西行の秀歌観を示しているとの理解を示された。

このような理解は、一見、間然するところがない。「四条大納言」は、貫之詠の長所を述べるべき箇所で、「させる詞の寄せもなく、うるはしく言ひ流したり」といっており、「上人」もそれを受けて、「貫之が哥のやうに、させる詞の寄せもなく、言ひ流すべし」と述べている。これらを見る限り、西行が、言葉の巧みさを避け、「平明率直」で「麗しく自然な流れ」の歌を庶幾したとする理解に、問題とすべき点はなさそうである。しかし、表面的にいくら文意が通っているように見えても、その中身が実際の和歌批評のあり方と相容れな

かったり、批評内容が対象となる和歌の実態と齟齬していたりすれば、適切な評言とはいえないだろう。そのような評言を、そのまま西行の秀歌観と結び付けるのは危険である。

そこで本稿では、「四条大納言」の発言①・「させる詞の寄せもなく、うるはしく言ひ流したり」を取り上げ、この発言自体の適否を検討することにしたい。

三　本説話の虚構性

まず、議論の前提として、本説話の虚構性について確認しておこう。この問題については、糸賀きみ江氏[9]の指摘が早い。糸賀氏は、公任と高遠の年齢関係を挙げ、

> 実際には、長和二年（一〇一三）高遠が六十五歳で没した時、公任は四十八歳の壮年であったから、このようなことが現実にありえたかどうかは甚だ疑問である。

と説かれた。公任は、長久二年（一〇四一）に七十六歳で没しており、そこから逆算して、生年は康保三年（九六六）と見られる[10]。一方、高遠の没年は、長和二年（一〇一三）であるが[11]、この長和二年は、先の糸賀氏の指摘にもあるように、公任四十八歳の年に当たる。このような状況を踏まえるならば、糸賀氏の疑問は妥当なものといえる。このような見方は、その後、久保田淳氏[12]、神山重彦氏[13]によっても示されている。このうち、神山氏は、問題の二首が、『拾遺和歌集』に連続して配列されていること[14]、及び、本書以前に、この話を伝えるものがないことなどを理由に、本説話が、『拾遺和歌集』に並ぶ二首を基にして、「平安時代も末期になってから形をととのえた説話であろう」との見方を示された。

以上のように、本説話を虚構と見るのが一般的であるが、その一方で、この話を事実に基づくものと見る立場もある。杉本まゆ子氏[15]は、「説話は説話ゆえ、誇張された部分を考慮に入れる必要があることは言うまでもないが、幾ばくかの現実を含んでいる物として考え」るとされたうえで、本説話について、

> 拾遺抄に二首並べて収められた故に生まれた説話の可能性もあるが、ここでは公任の言説と見なしておきたい。拾遺抄に高遠・貫之の順で掲げられていれば自ずと高遠は評価を気にするであろうし、撰者で従弟の公任に尋ねるというのは自然であろう。

と説かれる。確かに、問題の二首は公任撰の『拾遺抄』にも並べられており[16]、高遠がその撰歌意図を尋ねた、というようなことであれば、実際にあってもおかしくはない。また、中川博夫氏[17]は、本説話の「公任の両首に対する優劣の判断理由の内容」が、「一応『新撰髄脳』に窺われる公任の考え方に合致する」とされたうえで、本説話について、

> あるいは実話であっても不思議ではなく、高遠と公任という従兄弟同士の、和歌に執着する好き者ぶりが窺われる。

と説かれる。中川氏はここで、本説話が実話であったと明言されているわけではないが、同時に、実話であった可能性を完全に否定されているわけでもない。このように、話の大本が実話であった、という可能性まで含めれば、それを否定することは難しい。だが、そ

の一方で、問題の発言が実在の公任によるものであるかどうか、という点については、ある程度、見通しを持つことが可能である。その手掛かりとなるのは、ほかならぬ「詞の寄せ」という用語である。

渡部泰明氏[18]は、本説話の虚構性の問題とは全く別に、「よせ」という用語の使用例を広く見渡され、次のような指摘をされている。

「よす」という動詞によって和歌を注することは、かなり古くから行われているが、「よせ」という名詞形、まして「ことばのよせ」という限定された形では、西行のころまでの歌学書・注釈書には見られない。

この指摘に従えば、「詞の寄せ」という用語が歌学書・注釈書に現れるのは、「西行のころ」、すなわち平安時代末期ということになる。実際、公任の『和歌九品』や『新撰髄脳』にも「詞の寄せ」という用語は見られない。さらに渡部氏は、歌合判詞についても「あまり古い用例は現存しない」とされたうえで、

名詞形「よせ」の例では、藤原俊成の嘉応二年（一一七〇）『住吉社歌合』の判詞中のものが早い。

と指摘されている。この指摘は、本説話の「四条大納言」の発言を考える際に、重要な示唆を与えてくれる。すなわち、平安時代末期の俊成以前に、名詞形の「よせ」の使用が認められないのであれば、平安時代中期の公任が、「詞の寄せ」という用語をもって、和歌の優劣を判じたとは考えにくい。むしろ、「詞の寄せ」という用語は、平安時代末期の説話作者が、当時用いられていた言葉を取り込んで「四条大納言」に語らせた虚構の文言と見る方がよいだろう。したがって、この発言の適否を測るためには、まず、平安時代末期の和歌批評の例と比べることが必要である。そして、平安時代末期は、西行の生きた時代でもあり、その頃の用例と比べることは、本書の「上人」が、この発言をどのように理解したかを考えるためにも、有効な比較となるだろう。よって、以下の議論においては、平安時代末期の用例を中心にして検討してゆくが、それだけでは用例が限られるので、一部その前後の時代のものも参照することにする。

四　「させる〜なく、〜」

まず、発言全体の大枠である、「させる〜なく、〜」という表現について見よう。

「させる〜なく、〜」という表現には、前段と後段との間に、逆接の接続助詞などがなく、そのまま読むと、前段と後段に、同傾向の文言が配されるものと思われる。すなわち、前段が肯定的な内容であれば後段も肯定的な内容、前段が否定的な内容であれば後段も否定的な内容が並ぶと予想される。これを、実際の和歌批評の例で確かめてみよう。

一番　左　俊頼朝臣

かぎりありていそぎたちぬるいほのうちにたれをたのむのかりしたふらん

（一）

右勝　定信

むさし野にたびねする夜のさびしきにたのむのかりのなくぞうれしき

（二）

さきの歌は、させるふしもなく、ことばのつづきもすべら

かならず。次の歌は、「たのむのかり」とはただかりの名と思ひてよみたるにや。これは田面のかりと申すことなり。むさしのは田あるべしともきこえぬ野なれば、ひがごともやまうすべからん。されど文字をづかひなどのいますこしなだらぎたれば、勝つと定め申す。

（『摂政左大臣家歌合』・大治元年〔一一二六〕・源俊頼判）[19]

四十八番　左　家隆朝臣

しらすげのまののはぎはらあさなあさなおきまどはせる秋の初霜　（九五）

右勝　雅経朝臣

夜をさむみいまはあらしのをとめ子が袖ふる山の秋の初霜　（九六）

左もさせる難なく、いひしりてはきこえ侍るを、右の、今はあらしのをとめ子が、とおけるや、おなじ初霜もえんにきこえ侍れば、為勝

（『内裏歌合』・建保二年〔一二一四〕・藤原定家判）

前者は、『摂政左大臣家歌合』の俊頼の判詞、後者は、『内裏歌合』の定家の判詞である。

まず、前者を見ると、判者・俊頼は、一番「旅宿雁」・左の自詠について「させるふしもなく、ことばのつづきもすべらかならず」と評し、その後、右歌の欠点に言及しつつも、最終的に右の勝と判定している。和歌批評に用いられる「ふし」は、「歌の趣向・場面構成のこと」（『歌論集』付載の「歌論用語」[20]）、「享受者に、鮮烈な具体的印象を与えようと工夫した部分」（紙宏行氏）などと説明される言葉である。したがって、「させるふしもなく」は、そのような趣向や工夫の無いことを指摘したものであり、否定的な評言である。

また、それに続く「ことばのつづきもすべらかならず」も、同じく否定的な評言である。藤原将寛氏[22]によれば、俊頼判の「すべらか」は、「詞と趣向の関係を問題とする評語」であり、俊頼は、「詞の縁によって構成された」歌を高く評価する際に、この「すべらか」を用いているという。したがって、そのような「すべらか」を否定する「すべらかならず」は、明らかに、否定的な評言である。すなわち、「させるふしもなく、ことばのつづきもすべらかならず」は、前段、後段ともに、否定的な内容の文言が並んだ評言となっている。

次に、後者を見ると、判者・定家は、四十八番「秋霜」・左歌について、「させる難なく、いひしりてはきこえ侍る（を）」と評している。前段の「させる難なく」は、〈これといった欠点がなく〉という肯定的な評言である。また、後段の「いひしりてきこえ侍る（を）」は、「言ひ知る」が、〈言い方を知っている〉という意味の言葉で、ここでは、〈歌としての適切な詠み方がなされている〉、といった意味の肯定的な評言である。この番では、結果的に、右歌が勝とされているが、「させる難なく、いひしりてはきこえ侍る（を）」は、前段、後段ともに、左歌に対する肯定的な評言となっている。

このように、「させる～なく、～」は、前後に同傾向の内容が並ぶ表現と見てよいだろう。厳密に言えば、前段の末尾「なく」は、いわゆる連用中止になっており、連用中止は、その前後に接続関係が認められる場合、順接の可能性も、逆接の可能性もある。そのため、「順接か逆接かは場面によって判断せざるを得ない」[23]とされる。し

たがって、問題の発言の前段「させる詞の寄せもなく」と後段「うるはしく言ひ流したり」も、純粋な可能性としてだけ言えば、逆接の関係もありうるということになる。そして、もし逆接の関係であれば、前段と後段に、相反する内容の文言が配される可能性も生じる。だが、先に挙げた和歌批評の実例では、「させる～なく、～」の前段と後段には、いずれも同傾向の文言が置かれており、問題の発言の場合のみ、あえて逆接で理解する必要はないと思われる。

これらを踏まえると、問題の「させる詞の寄せもなく、うるはしく言ひ流したり」も、前段と後段には、肯定的な評言が並ぶか、否定的な評言が並ぶかの、いずれかであると予想される。少なくとも、表現の大枠からはそうなるはずである[24]。では、実際はどうであろうか。以下、前段と後段の内容をそれぞれ見ながら、この点を考えてゆこう。

五　「うるはしく言ひ流したり」

論述の都合上、まず、後段を取り上げる。後段の「うるはしく言ひ流したり」は、「端正に言い流してある」といった意味であり、これは、明らかに肯定的な評価を示す文言である。「うるはし」は、例えば『古典基礎語辞典』で、

> 中古以後の和文脈では、主に、外面的にきちんと正しく整っているさまをいい、美の表現としては、端正な美、整然とした美を表す。[25]

と説明されるように、それ自体が肯定的な評価を示す言葉である。それは、和歌批評において用いられる場合も同じで、『歌論集』付載の「歌論用語」[26]が、

> よく整って調和のある美しさをいう。『和歌九品』が「ほどうるはしくて余りの心ある」歌を「上品中」に位置づけたのは、「うるはし」を重んじた結果である。……（中略）……俊成の「うるはしくくだりて」「文字続きうるはしく」（広田社歌合）、定家の「心・姿うるはしくくだりて」（宮河歌合）等の判詞は、一首の声調に表れた表現効果を評価する際に「うるはし」を用いている例である。

と説明するとおりである。

また、「うるはし」に続く「言ひ流す」も、肯定的な評価の一部として用いられる言葉である。『角川古語大辞典』[27]によれば、「言ひ流す」には、①「いひふらす」、②「さらっと軽く表現する」の二つの意味があるとされている。このうち、①の場合は否定的なニュアンスを感じさせるが、②の場合であれば、肯定的な文言と見なしてもよいだろう。実際の和歌批評の用例としては、次のようなものがある。

> 十一番　左持　　脩範
> たぐひなく深き心をくみてしれ頼をかくるかもの川波（一四一）
> 右　　顕家
> 我が身にもうき瀬あらじとたのむかなかもの河水すまんかぎりは　（一四二）
> 左、たのみをかくる賀茂の川波といへるすがたいひながして宜しくみえ侍り、ただし右は川波、河水なるをしひてふかさあさ尋ね侍らんもはばかりおほし、例の持とすべし

（『別雷社歌合』・「述懐」・治承二年〔一一七八〕・藤原俊成判）

ここでは、賀茂川を詠んだ歌に対して、「言ひ流す」が用いられている。この例では、左歌の下句を挙げ、その「すがた」が「いひながし」てあることで「宜しくみえ」ると評されている。左歌の結句「かもの川波」は、武田元治氏[28]が、「賀茂川の波を言うことで、賀茂の社の神をさりげなく示したもの」と指摘されるように、〈賀茂川の波〉で、〈賀茂社の神〉を示唆した（＝「さらっと軽く表現」した）ものである。この番の最終的な判定は「持」であるが、「いひながし」てあることは、「宜しく見え」るという判断の前提になっており、「言ひ流す」ことが、肯定的な評価へと繋がっている。したがって、「言ひ流す」という言葉も、肯定的な評価の一部として用いられる言葉と見て、特に問題はないだろう。

以上のように、後段に用いられた「うるはし」「言ひ流す」は、ともに肯定的な評価を示す言葉であり、「うるはしく言ひ流したり」は、全体として、貫之詠を肯定的に評価する文言である。それでは、これに先立つ前段はどうであろうか。

六　「させる詞の寄せもなく」

前段の「させる詞の寄せもなく」は、そのまま解すれば「たいした詞の寄せもなく」といった意味であり、貫之詠に「詞の寄せ」のないことを指摘する文言である。これが、肯定的な内容の後段にそのまま繋がっていることを踏まえれば、「詞の寄せ」のないことが、肯定的に評価されたことになる。だが、実際の和歌批評の場においては、「詞の寄せ」のないことが肯定的に評価されることはなかったようである。

渡部泰明氏の指摘によれば、名詞の「よせ」を初めて判詞に用いたのは、俊成であったと見られる。その俊成の判詞の中から、「四条大納言」の発言と近い、「させる詞の寄せなく」という文言の用例を二つ、見てみよう。どちらも、『別雷社歌合』の「述懐」題のものである。

廿二番　左持　　定宗
さりともとたのむ心になぐさむはかつがつ神のしるしなりけり　（一六三）
右　　伊綱
さりともとかもの川波はやくよりたのみをかくるしるしみせなん　（一六四）

左右ともにさりともといへる心すがたなどをかしながら、させる詞のよせなくきこゆ、右は賀茂の川浪によせたる心はをかしきを、をはりの句のことばいささかおとれるなるべし、なぞらふるに又持とすべきにや

廿四番　左　　季広
さりともと神のちかひをたのむこそしづむ歎のたえまなりけれ　（一六七）
右勝　　備前
千とせたつわかばの藤のさかへをも頼めば神にねぎぞかけつる　（一六八）

左、心は優なるべし、しづむ歎のなどいへるやさせることばのよせなく侍らん、右、ちとせの松のわか葉の藤は、ねぎかくることばもことよりてはきこゆ、以右為勝

まず前者であるが、判詞の前半部では、左右両詠の初句「さりともと」について、「心すがたなど」を「をかし」と誉めたうえで、逆接の「ながら」を用い、「させる詞のよせなく」へと続けている。この判詞では、冒頭の「左右ともに」がどこまでかかるのか、やや不明瞭であるが、渡部氏の指摘されるように、右歌の第四句の「かくる」は、第二句の「波」と「縁語」であるため、「させる詞のよせなく」は、左歌に対する評言と見られる。この判詞について、武田氏[29]は、

俊成の判詞は、左右ともに「さりともと」と詠んだ心や姿を「をかし」と評しているが、とりたてた縁語などの修辞が見られない点に、やや不満を感じているようだ。

と指摘される。武田氏は、「させる詞のよせなく」を、左歌に限定した批評とは見なされていないが、「縁語などの修辞」のない点について、「やや不満を感じているようだ」とされている点は、そのとおりであろう。すなわち、この「させる詞のよせなく」という評言は、左歌の欠点の指摘であると見られる。

次に後者であるが、この判詞ではまず、左歌を、「心は優なるべし」と誉めたうえで、第四句「しづむ歎の」について、「させることばのよせなく侍らん」と評し、最終的に右歌の勝としている。この箇所についても、武田氏[30]は、

俊成の判詞は、左歌については、「心は優」と評する一方、「しづむ歎の」という言い様に「させる言葉のよせ」のないことを不満としている。「しづむ」に関して縁語を用いるような表現上の工夫を求めたものであろう。

とされる。また、渡部氏も、右歌の第二句「藤」と結句「かく」が「縁語」である点に触れ、左歌について、

「沈む」というなら賀茂川や御手洗川の「川」にでも言寄せよ、あるいは「歎き」の「木」に関わらせよ、などと言いたいのであろう。

と指摘される。両氏の説かれるように、左歌には適切な「縁語」がなく、この場合の「させることばのよせなく」も、対象となる左歌の欠点の指摘と考えられる。

では、〈「詞の寄せ」がある〉場合はどうだろうか。ここでは、西行の歌を判じた、定家の例を挙げる。西行の『宮河歌合』[31]には、

廿番

左

秋篠や外山の里やしぐるらん生駒のたけに雲のかかれる（三九）

右

なにとかく心をさへは尽くすらんわが嘆きにて暮るる秋かは（四〇）

心をさへは尽くすらんなどいへる、ことばのよせありて、ことなるとがなく侍れど、生駒のたけの雲を見て、外山の里の時雨を思へる心、猶をかしく聞え侍れば、左の勝とや申すべからん。

（『宮河歌合』・文治五年〔一一八九〕・藤原定家判）

とある。傍線部は、右歌の第二・三句の「心をさへは尽くすらん」についての評言である。この第二・三句について、武田氏[32]は、「心をさへは」の「さへ」に注目され、

私見では『堀河百首』の題にもなっている「九月尽」の語が作者の念頭にあり、季節が「九月尽」になると自分の心まで「尽くす」ことになるのはなぜだろう、との作意ではないかと思う。

と説かれたうえで、定家の判詞も、

その「九月尽」との言葉の縁に触れたものであろう。

と指摘された。このように、「九月尽」と「心を尽くす」との間に「言葉の縁」があるという見方は、井上宗雄氏[33]、平田英夫氏[34]、久保田淳氏・吉野朋美氏[35]によっても示されている。このうち、井上氏は、判詞の「よせ」について、

言葉の上で縁のあること。縁語、または縁語を用いた表現。ここでは、秋の暮、すなわち「九月尽」と「心を尽す」とが縁語関係にある。

と注され、「秋の暮」である「九月尽」と「心を尽す」とが「縁語関係」にあると指摘される。ただし、右歌中には「九月」の語がなく、この場合、「九月尽」と「心を尽す」とが「縁語」であるとまでは言えない。井上氏以外の諸氏が、「縁語」という言葉を用いず、「言葉の縁」（武田氏、久保田氏・吉野氏）、「縁あることば」（平田氏）といった言い方に留めているのも、そのためであろう。だが、そうすると今度は、この例のみ、「詞の寄せ」という用語の指すものが異なることになる。これについて、渡部氏は、

「尽くし」は意味の文脈をも二重にしている〔＝「秋を尽くし」ト「心を尽くし」〕ので、通常は縁語とは呼ばずに、掛詞として処理するだろう。ただし、歌を詠む作者の側からいえば、「尽くす」という言葉に即して自然の推移と我が心をつなげているわけだから、広い意味で言葉によって縁づけられているといってよい。これもいわゆる縁語に近いとはいえ、より広い意味で言葉のつなげ方を指し、なおかつ一首の「心」を歌の中に位置づける詠み口を含んでいる例である。

と説かれ、「尽くす」が二重文脈を形成する「掛詞」である点は認められるが、一方で、「縁語」に近いものの、通常は「縁語」と呼ばないとされる。たしかに、「九月尽」という言葉を前提にする場合は、このような理解が適切である。しかし、この例も、「九月尽」ではなく、「秋尽」を意識した表現と考えれば、通常の「縁語」として理解することが可能である。「秋尽」は、例えば、白居易の「晩秋夜」[36]に、

塞鴻飛急覚秋尽　鄰鶏鳴遅知夜永（塞鴻　飛ぶこと急にして　秋の尽くるを覚え、鄰鶏　鳴くこと遅くして　夜の永きを知る。）

とあり、これは、一字めを「寒」とした「寒鴻飛急覚秋尽　鄰鶏鳴遅知夜永」という形で、慈円・定家の『文集百首』の句題としても利用されている[37]。また、歌集の詞書では、『金葉和歌集』に「雨中秋尽といへることをよめる」（三奏本・第三・秋・二五八／初度本・第三・秋・三七七にも）のような使用例もある[38]。このような例を踏まえれば、「秋尽」という言葉を意識した表現と見ることは十分に可能だと思われる。そして、この点を認めるならば、通常の「縁語」の詠み方の歌と同じになる。

「心をさへ」という表現は、「心」以前に〈～するもの〉が、歌の中に明示され、「縁語」を形成するのが一般的である。例えば、次のような歌がある。

題しらず　　平貞文

○風ふけば花さくかたへ思ひやる心をさへもちらしつるかな

（『新千載和歌集』・巻第二・春歌下・一二二）

白河院鳥羽殿にて前栽合せさせ給けるによめる　周防内侍

○あさなあさなつゆおもげなるはぎのえにこころをさへもかけてみるかな

（『詞花和歌集』・巻第三・秋・一一六）

これらの歌では、〈散らすもの―「花」〉、〈懸くもの―「露」〉、のように、「心」以前に〈～するもの〉が、歌の中に示され、それぞれ、「花―散らし」、「露―懸け（て）」[39]が「縁語」になっている。

以上を踏まえると、西行の「心をさへはつくすらん」も、対象領域の拡大を表現する「さへ」[40]を用いることで、「心」以前に「尽くす」もの、または「尽く（＝尽きる）」もののあることを暗示し、そこから「秋尽」を連想させ、第三句の「尽く（す）」と結句の「秋」を「縁語」としているということになる。

このように、右の「なにとかく」詠には、「縁語」、すなわち「詞の寄せ」がある。定家の判詞「ことばのよせありて、ことなるとがなく侍れど」は、これを踏まえたものと見られる。この判詞について、渡部氏は、

基本的には、『伊勢物語』を思わせ、景の背後に余情を漂わせる左の秀歌と比べつつ、応分の長所を引き出そうとしているのだろう。

と説かれる。この場合、「詞の寄せ」のあることが、右歌の勝には繋がらなかったが、「ことばのよせありて」は、右歌の「長所」の指摘であるとはいえるだろう。すなわち、「詞の寄せ」のあることが、肯定的に捉えられているのである。

これらの例を見ると、平安時代末期において、「詞の寄せ」のないことは、批判の対象にこそなれ、称賛の対象にはならなかったであろうと考えられる。すなわち、「させる詞の寄せもなく」という評言は、本来、修辞の不足を批判する際に用いられる文言であり、対象となる和歌の「詞の寄せ」の不使用を誉める言葉ではなかったということである。

以上、前節と本節で見てきたことをまとめると、次のようになる。本説話の「四条大納言」の発言①は、「させる詞の寄せもなく」という否定的な内容の前段と、「うるはしく言ひ流したり」という肯定的な内容の後段とが、逆接の接続助詞などを介さず、そのまま繋げられている。これは、和歌批評の言葉としては不自然であり、むしろ誤った文言といえる。したがって、この評言を、実際の歌人の秀歌観と結びつけて考える際には、慎重な態度が必要になるだろう。

七　貫之詠の「詞の寄せ」

前節までで、問題の発言の前段・後段の接続の不自然さは確認できたが、実は、この発言には、ほかにも不自然な点がある。それは、発言内容が、対象となる貫之詠の実態に即していないという点である。

「させる詞の寄せもなく」は、貫之詠に「詞の寄せ」がないことを指摘する文言であるが、そのように評された貫之詠にも、「詞の寄せ」と見るべき修辞法が用いられている。この点については、久保田淳氏もすでに指摘されている。[41] 久保田氏は、第三節で引いた、この話が虚構であることの指摘の後で、

> 貫之の歌について「させる言葉のよせもなく」というのも解せない。ただ、貫之の作が全体的にすべらかであるに対して、高遠の作が節くれだってごついことは確かである。公任好みの風体は、当然貫之作の方であろう。

と説かれ、「させる詞の寄せもなく」という文言そのものに、疑問を呈されている。さらに、別の機会[42]にも、

> 先に指摘したように、実は貫之の歌にも言葉のよせ（縁語などの連想関係）は認められるのではあるが、それは自然でなだらかであって、目立たない。

と指摘されている。氏は、「させる詞の寄せもなく」という評言自体が、貫之詠の実態とそぐわない点を繰り返し指摘されているのである。一方、貫之詠の修辞法については、

> 「かげ」は「影」と馬の毛並の「鹿毛（かげ）」の掛詞である。「影」は馬の姿の意であろうが、さらに清水に宿る月影（月の光）をも暗示しているのであろう。……（中略）……望月は長野県北佐久郡望月町〔＝現佐久市〕。『八代集抄』にいうように、地名の望月に十五夜の月、望月を響かせている。

と説かれる。[43] ここでは、「馬の姿」の意の「影」と馬の毛並の「鹿毛」、地名の「望月」と「十五夜の月」の「望月」とが、それぞれ「掛詞」であるとされ、さらにその「かげ」が「月影（月の光）をも暗示している」と説明されている。久保田氏はこの箇所で、「縁語」という直接的な言い方はされていないが、先に引いた箇所では、「実は貫之の歌にも言葉のよせ（縁語などの連想関係）は認められる」とされており、貫之詠に、言葉の「連想関係」があることは認められている。

また、小町谷照彦氏[44]は、貫之詠の「望月」について、

> ○望月　信濃。駒の産地。満月を連想し、「影」はその縁語。

と注され、「影」が「望月」と「縁語」であることを端的に指摘されている。

このように、貫之詠にも「詞の寄せ」と見るべき修辞法が用いられており、「四条大納言」の「させる詞の寄せもなく」という評言は、それ自体が、対象となる貫之詠の実態に反した、不自然な評言なのである。[45]

それでは、このような齟齬について、これまで、どのように解釈されてきたであろうか。この点については、先に引いた久保田氏も、一つの見方を示されていた。すなわち、「実は貫之の歌にも言葉のよせ（縁語などの連想関係）は認められるのであるが、それは自然でなだらかであって、目立たない」とされ、〈貫之詠にも「詞の寄せ」はあるが、目立たない〉という解釈をされている。また、このような理解は、早く、上條彰次氏[46]や藤平春男氏[47]によっても示されている。ここでは、上條氏の説を挙げよう。氏は、本書、及び『愚秘抄』所収の本説話[48]（当該箇所は、「貫之が歌はさせるふしもなくなびらかにいひくだせり」とある）を取り上げられ、

たしかにこの貫之詠は、「させる詞のよせ」「させるふし」がないとはいえない。

と述べられ、貫之詠に「よせ／ふし」のあることを認められたうえで、

文芸として実と虚とのあわいに遊ぶ軽やかさが「よせ」「ふし」の知巧性を目立たせず、詞の「うるはしさ」「なびらかさ」とは異なる姿のそれを形象化せしめたのであり、前掲の「させる詞のよせもなく」という公任の批評も、この妙に騙されていた気味がなかったとはいえまい。

と説かれた。上條氏は、判定をした「公任」も、貫之詠の修辞の妙に騙されて、「させる詞のよせもなく」という批評を行ったという可能性を示唆されているが、そのような判断の基になっているのは、〈貫之詠にも「よせ／ふし」はあるが、それらの知巧性は目立たない〉という理解である。

これらは、「させる詞の寄せもなく」という一節を、〈「詞の寄せ」はあるが目立たない〉の意であると読み替えることで、「四条大納言」の発言と貫之詠の修辞の実態との齟齬を埋めようとしたものといえるだろう。だが、このような読み替えは本当に必要だろうか。

また、このような読み替えの背後には、「させる詞の寄せ」の「させる」を重視する見方が存する可能性もある。〈詞の寄せなし（＝詞の寄せがない）〉というのは、そのままの意味であるが、〈させる詞の寄せなし（＝たいした詞の寄せがない）〉というのは、〈たいしたことのない「詞の寄せ」ならばある〉という意を含むようにも見えるからである。「望月」と「かげ」の「縁語」を、〈たいしたことのない「詞の寄せ」〉と捉えれば、〈「詞の寄せ」はあるが目立たない〉という理解との径庭は小さくなる。だが、このような捉え方も十分ではない。該当箇所を、〈たいしたことのない「詞の寄せ」はある〉の意と解する場合、後段の「うるはしく言ひ流したり」と繋げて、「たいしたことのない詞の寄せはあり、端正に言い流してある」とすると、貫之詠を誉める文言として不自然である。一方、これをもし逆接で繋げるならば、「たいしたことのない詞の寄せはあるが、端正に言い流してある」となり、一見、文脈は通じそうである。しかし、この場合、「詞の寄せ」が、「難」や「とが」のように、忌避すべきものとなってしまう。「詞の寄せ」が、そのように忌避すべきものでなかったことは、前節で見たとおりである。よって、「させる詞の寄せもなく」の「させる」を重視しても、この発言の根本的な不自然さは解消されないのである。

したがって、この発言に対しては、「四条大納言」の肩を持つような読み替えをするのではなく、むしろこれが、実際の和歌批評のあり方と相容れないばかりか、対象となる貫之詠の修辞の実態とも齟齬した、不適切な評言であると認めることが重要であると考える。

八　むすびにかえて

以上、本説話の「四条大納言」の発言①・「させる詞の寄せもなく、うるはしく言ひ流したり」について見てきた。この発言は、和歌批評として不適切なものであるというのが本稿の結論である。本稿第二節の末尾で示した、発言そのものの適否を検討する、という問題

設定に即していえば、この発言は否である。したがって、この発言を表面的な文意のまま受け入れ、それを西行の秀歌観と直結させる議論には、再考が必要である。その場合、このような不備のある発言を、そのまま引用して肯定する「上人」の意図をどう見るべきかが問題となるだろう。また、本説話には、今回取り上げた発言の後にも、「四条大納言」の和歌批評が続いており、そちらについても検討を加えなければならない。これらの問題については、機会を得て改めて論じたい。

注

1 蓮阿と西行の関係、及び、本書の成立時期については、久松潜一編校『歌論集（一）』（三弥井書店・中世の文学・一九七一・二）の「解題」（久保田淳氏）に要を得たまとめがある。

2 藤原公任のことであるが、実在の公任と区別するため、本稿では、説話中の公任を「四条大納言」と呼ぶ。

3 『西行上人談抄』の引用は、国立公文書館内閣文庫（二〇二・三七）本『蓮阿記』（同館デジタルアーカイブ）に拠り、適宜、漢字を当て、濁点、句読点、引用符などを加えた。漢字を当てたり、仮名遣いを改めたりした場合は、もとの仮名をルビに残し、送り仮名を加えた場合には、該当箇所に傍点を付した。なお、久保田淳編『西行全集』（一九八二・五）所収の同本翻刻（西澤美仁氏）も参照した。

4 橋本不美男ほか校注『歌論集』（小学館・日本古典文学全集50・一九七五・四／小学館・新編日本古典文学全集87・二〇〇二・一。引用は後者に拠る）付載の「歌論用語」では、「よせ」について「詞の上の縁のあることをいう。……〔中略〕……とくに縁語関係をさす」と説明し、『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー・二〇一四・一二）の「よせ」の項（浅田徹氏）でも、「歌に出てきた語に、関係のある語を添加して、一首の構成を緊密にすること。多くは縁語を指す」とする。なお、これらの解説では、「よせ」という名称で立項されているが、『西行上人談抄』では、すべて「詞の寄せ」という形で用いられており、本稿では、「詞の寄せ」という呼称を用いる。

5 実在の西行と区別するため、本稿では、本書の発話者を「上人」と呼ぶ。

6 「心得つべし」の「つ」は補入。

7 石津純道「西公談抄に就いて」『国文学解釈と鑑賞』（三十一・一九三八・一）。

8 錦仁「叙景的表現と詠作主体の変質」『中世和歌の研究』（桜楓社・一九九一・一〇）。

9 （注1）前掲書、『西行上人談抄』の補注四。

10 公任の伝記については、以下の研究を参照した。
①村瀬敏夫「藤原公任伝の研究」『平安朝歌人の研究』（新典社・一九九四・一一）。初出は『東海大学文学部紀要』（二一・一九六〇・三）。
②伊井春樹「公任年譜考」『物語の展開と和歌資料』（風間書房・二〇〇三・一二）。初出は、『国文学研究資料館紀要』（一〇・

一九八四・三）。

③小町谷照彦『王朝の歌人7　藤原公任』（集英社・一九八五・六）。

高遠の伝記については、以下の研究を参照した。

①名子喜久雄「『藤原高遠略伝』試稿」鈴木一雄編『平安時代の和歌と物語』（桜楓社・一九八三・三）。

②中川博夫「解説」『大弐高遠集注釈』（貴重本刊行会・私家集注釈叢刊17・二〇一〇・五）。

秋山虔・久保田淳『古今和歌集　王朝秀歌選』（尚学図書・鑑賞日本の古典3・一九八二・一）。

神山重彦「『きりはらの駒』と『もちづきの駒』――『拾遺集』所載歌を核とする一和歌説話の考察――」小沢正夫編『三代集の研究』（明治書院・一九八一・五）。神山氏の説は、以下、同論文に拠る。

　少将に侍りける時、こまむかへにまかりて　大弐高遠

相坂の関のいはかどふみならし山たちいづるきりはらのこま

（『拾遺和歌集』・巻第三・秋部・一六九）

　延喜御時月次御屏風に　つらゆき

あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま

（同・一七〇）

引用は、『新編国歌大観』（角川書店・CD-ROM版 Ver2・二〇〇三・六）に拠る。以下、特に断らない限り、和歌、及び歌合判詞の引用は同書に拠る。

杉本まゆ子「公任歌論の享受――『新撰髄脳』引用と『簸河上』を中心に――」『書陵部紀要』（五二・二〇〇一・三）。

　少将に侍りける時こまむかへにまかりて　左衛門督高遠

あふさかのせきのいはかどふみならし山立ちいづるきりはらのこま（『拾遺抄』・巻第三・秋・一一三）

　延喜御時月令の御屏風にこまむかへのかた有る所に　貫之

あふさかのせきのし水に影見えていまやひくらむもち月のこま

（同・一一四）

（注11）前掲書②。

渡部泰明「西行の『ことばのよせ』」『中世和歌史論――様式と方法』（岩波書店・二〇一七・三）。初出は「西行の鈴鹿山の歌と『ことばのよせ』――院政期の縁語・掛詞意識――」久保田淳編『論集　中世の文学　韻文篇』（明治書院・一九九四・七）。

渡部氏の説は、以下、同論文に拠る。

引用は、鳥井千佳子『忠通家歌合新注』（青簡舎・新注和歌文学叢書18・二〇一五・一〇）に拠る。

（注14）前掲書。

紙宏行「歌論用語研究」『歌論の展開』（風間書房・和歌文学論集7・一九九五・三）。

藤原将寛「俊頼判における歌合評語『なだらか』と『すべらか』の差異について」『国文学論叢』（六二・二〇一七・二）。

松村明編『日本文法大辞典』（一九七一・一〇）の「中止法」の項（坂梨隆三氏）。

「～なく」という連用中止の形は、対比を示すために、「ことなるふしもなく、又させるとがなし」（『住吉社歌合　嘉応二年』・

「旅宿時雨」十五番・藤原俊成判）のように、前後に相反する内容を並べることもできるが、問題の発言の後段「うるはしく言ひ流したり」には、前段「させる詞の寄せもなく」の「～もなく」に対応する「～なし」といった言葉がないため、このような例とは異なる。

25 大野晋編『古典基礎語辞典』（角川学芸出版・二〇一一・一〇・初版／二〇一一・一一・再版。引用は、後者に拠る）の「うるはし」の項（依田瑞穂氏）。

26 （注4）前掲書。

27 『角川古語大辞典』（角川学芸出版・CD-ROM版・二〇〇二・二）に拠る。

28 武田元治「別雷社歌合注釈（三）」『大妻女子大学紀要―文系―』（四〇・二〇〇八・三）。

29 （注28）前掲書。

30 （注28）前掲書。

31 引用は、久保田淳編『西行全集』所収の宮内庁書陵部蔵『続三十六番歌合』の翻刻（藤田百合子氏）に拠り、表記の変更については、注（3）と同様に行った。なお、『新編国歌大観』（底本は中央大学図書館蔵伝飛鳥井雅綱筆本）では、当該箇所が、「言のはのよせありて、殊にとがなく侍れど」となっているが、文意に違いはない。

32 武田元治『西行自歌合全釈』（風間書房・一九九九・一一）。

33 井上宗雄校注・訳『中世和歌集』（小学館・新編日本古典文学全集49・二〇〇〇・一一）所収の『宮河歌合』当該歌の項。

34 平田英夫『御裳濯河歌合宮河歌合新注』（青簡社・新注和歌文学叢書11・二〇一二・三）。平田氏は、「こと葉のよせありて」について、「「九月尽」と「心を尽くす」が縁あることばであることをいう」と注される。

35 久保田淳・吉野朋美校注『西行全歌集』（岩波文庫・二〇一三・一二）。同書では「事のはのよせありて」について、「二、三句の表現が、秋の暮れである九月尽日を想起させ、言葉の縁があることをいう」と注される。

36 『白氏文集』・巻十四。引用は、本文、訓読、ともに岡村繁『新釈漢文大系　第99巻　白氏文集（三）』（明治書院・一九八八・七）に拠り、漢字の字体を一部改めた。

37 『拾玉集』・一九四二、『拾遺愚草』員外・四四二。

38 三奏本の全文を引用すると、

雨中秋尽といへることをよめる　大納言公任
いづかたに秋のゆくらむわがやどにこよひばかりのあまやどりせよ

である。なお、この歌は、『詞花和歌集』（巻第三・秋・一三九）に、

雨中九月尽といふことをよめる　前大納言公任
いづかたにあきのゆくらんわがやどにこよひばかりはあまやどりせで

として載るが、『公任集』（一三三）では、

九月つごもりの日、あきのかげはあめのうちにつきぬといふことを

いづかたに秋は行くらんわがやどに今夜ばかりは雨やどりせで

とあり、『金葉和歌集』の方が、本来の形に近いようである。

39 工藤重矩氏は、『金葉和歌集　詞花和歌集』（岩波書店・新日本古典文学大系9・一九八九・九）の『詞花和歌集』の注釈において、結句の「かけて」について、「いつも心に思うの意。「露」の縁語」と指摘される。

40 野村剛史氏は、山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』（明治書院・二〇〇一・三）の「さへ」の項で、

古代語の「さへ」の意味はしばしば「添加」と述べられる。しかしそれらの用例の現代語訳は、たいてい「…までも」とあるように「範囲の拡大して行った結果」という含みを持ち、現代語の「まで」に近い。添え加わるというよりも、対象領域の拡大を表現すると述べたほうが適切だろう。

と指摘される。

41 （注12）前掲書。

42 久保田淳校注・訳『百人一首　秀歌選』（ほるぷ出版・日本の文学古典編27・一九八七・七）。

43 （注42）前掲書。

44 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』（岩波書店・新日本古典文学大系7・一九九〇・一）。

45 この貫之詠はもともと屏風歌であり、その屏風絵に満月が描かれていたのか否か、また、この駒迎が夜の情景であるのか否かといった点で議論が重ねられてきた。議論の詳細をここで紹介する余裕はないが、最新の研究成果である、竹鼻績『拾遺抄注釈』（笠間書院・二〇一四・九）では、

逢坂の関での駒迎は早朝のことであるので、満月はもちろん月も描かれていなかったと思われる。この歌から皓々と輝く満月を想像するのは、貢馬の牧の名が十五夜をいう望月と同じであるからである。

と説かれ、屏風絵に満月は描かれていなかったと判断されている。ただし、馬産地の名である「望月」が、「満月」を連想させる言葉である点は、竹鼻氏も認められており、屏風絵に、「満月」が描かれていたかどうかに拘わらず、「望月」と「かげ」とが、言葉同士の関係として「縁語」である点は、認めてよいと考える。

46 上條彰次「貫之「望月の駒」詠考」（『中世和歌文学論叢』・一九九三・八）。初出は『文学』（三九―一〇・一九七一・一〇）。

47 藤平氏は、『愚秘抄』所収の本説話に触れ、「貫之歌は、「望月」と「影見えて」との縁語関係によって月光が射しているごとく暗示し、それを馬の姿の清水に映る背景としており、立体的であるため、技巧が目立つことなくイメージが鮮明に浮かんでくる」と指摘されている（窪田章一郎・杉谷寿郎・藤平春男編『鑑賞　日本古典文学　第7巻　古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集』・角川書店・一九七五・九・初版／一九九一・七・八版。引用は後者に拠る）。

48 引用は佐佐木信綱編『日本歌学大系』第四巻（風間書房・一九五六・一）に拠る。なお、本稿では、『西行上人談抄』よりも後

に成立した『愚秘抄』の本文については深く立ち入らないが、「させるふしもなくなびらかにいひくだせり」のように、前段が「させるふしもなく」という文言である場合、「縁語」のある貫之詠に対して用いられても不自然さは少ない。和歌批評に用いられる「ふし」は、俊頼の判詞を掲げた際（第四節）に触れたように、「歌の趣向・工夫」といった意であるため、「縁語」のある歌に対してでも、その工夫（＝「ふし」）が足りない、という指摘は可能だからである。しかし、『愚秘抄』の形であればすべての問題が解決するかと言えばそうではない。『愚秘抄』の場合も、後段の「なびらかにいひくだせり」は、「なだらかに言い下してある」といった意味の肯定的な評言である。したがって、「させる～なく、～」という表現の中に、否定的な内容の前段と肯定的な内容の後段とがある点では、『西行上人談抄』と同じだからである。

［付記］　本稿は、第六十二回和歌文学会大会（平成二十八年十月九日　於東京大学）における口頭発表「『西行上人談抄』の「詞の寄せ」――「四条大納言」の発言を起点として――」の一部に基づきます。発表に際し、ご意見、ご教示を賜った先生方に、厚くお礼申し上げます。

（きたに　みつる・北海学園大学非常勤講師）